



シェルターの夜



いちは

シェルターの夜

シェルターの天井照明が薄明かりになった。

「もう、そんな時間かあ」

隣でユミがつぶやいた。

「夕飯にしよう」

リーダーのシンイチが言った。

僕は、配られたカロリーメイトを頬張った。

ボソボソとした感触で喉が渴いた。

今日の配給分の水は残り少ない。

僕はほんの少しだけの水で、口を湿らせた。

薄暗がりの中、離れて座っている誰かのアクビの音がした。

それにつられたかのように、ユミもアクビして、僕もなんだかアクビをしたくなった。

アクビも、うつるのだろうか。

僕は横になった。

毛布を頭からかぶったユミの背中を見つめた。

僕たちがシェルターに入って、今日でどれくらいになるのだろう。

外の世界はどうなっているのだろうか。

同じようなシェルターで生活している人たちがいるはずだ。

みんな、あとどのくらいシェルターにいる計画なんだろう。

それとも、もしかしたら、もう、世界なんてものはなくなっているのかもしれない。

最初はだれも大げさには考えなかった。

独居老人の死は日常茶飯事だったし、

若い男女が孤独のうちに自殺しても話題になることは少なかった。

だけど、いつのころからだろう。

年間自殺者が五万人を超えたあたりから、大人たちはなにかおかしいと気づきはじめた。

さまざまな対策はことごとく失敗。

あっという間に、月の自殺者は二万人にまでのぼった。

死にたくない、だけど死なないとやっていけない。

たくさんの人たちが泣きながら自殺していった。

そしてそれは、日本だけの話じゃなかった。

全世界で似たような自殺が相次いでいた。

そんななか、若い学者の発表が注目を浴びた。

寂しさが、感染する。

感染性の寂しさ症候群。

日本のニュースでは「イルズ」とか「イルス」とか言われていた。

正確には「ILS」。

ネットの情報だと、英語圏では「アイルス」と言われているようだ。
「Infectious Loneliness Syndrome」
それがウイルス性なのか、細菌性なのか、あるいは別のなにかなのか。
神の御意思だと言う人もいた。
ある人は宇宙人の攻撃だと騒いだ。
別の誰かは地球の自浄作用だとため息をついた。
でも、だれも、本当の答えを知らなかった。
治し方も、予防法も分からなかった。
残された方法は、感染していない人たちだけで避難すること。
こうして、急ごしらえのシェルターに僕たちは逃げこむことになった。

ILSは、すでに世界を滅ぼしてしまったのだろうか。
もう、僕たちは、このシェルターから出られないのかもしれない。
そんなことを考えていたら、いつの間にか眠り込んでいた。

僕は教室にいた。
中学校二年生になってから、ほとんど不登校だった僕の夢に出る教室だ。
細部はいまいで、ところどころ明らかに小学校のような部分もある。
どうやら昼休みのようで、ブレザーの同級生たちが弁当を食べている。
どの顔も、知っているような、知らないような。
皆、それぞれグループを作っているけれど、僕は独りで食べていた。
教室の隅の方を見ると、ユミがいた。
ユミも独りだった。
ユミとは、このシェルターで知り合ったのだから、これが夢だということがはっきり分かった。
僕は独りで弁当を食べていたけれど、別に何とも感じなかった。
ユミも、淡々とした表情で弁当を食べている。
誰も僕に話しかけないし、僕も誰かと話す気にはならない。
声をかけられたら答えるつもりだし、必要があれば僕から声をかけるつもりだ。
ただ、誰も僕とは喋らず、僕も喋る必要がないだけ。
きっと、ユミも同じなのだろう。
ふとユミが座っていた机に目を向けると、ユミはいなくなっていた。
教室の中を見渡してみても、ユミの姿はない。
グループを作っている皆は、笑顔ではしゃいでいた。
彼らの笑い声を聞きながら、改めて教室中を探してみた。
ユミはどこにもいなかった。
まあ、どうでもいいや。
頭ではそう思っているはずなのに、僕は、立ち上がっていた。

そこで、目が覚めた。
ほんの少し離れた場所に、毛布にくるまったユミの背中があった。
なんとなく、僕の口からため息がもれた。
薄暗闇の中、誰かがクシャミをした。

音に反応したのか、ユミは少しビクリとし、それから寝返りをうった。

僕の方を向いたユミの目は、開いていた。

ユミと目が合った。

ユミの瞳は濡れていた。

「ゴ」「メ」「ン」

ユミが唇を動かした。

僕は、小さく首を振った。

僕とユミ。

どちらがどうやって感染したのか、それは分からない。

僕からユミへうつしたのか、ユミから僕にうつったのか。

今、ただ一つ確実に言えることは、僕もユミも、寂しさを発症してしまったということだ。

だから僕たちは、なるべく早く、このシェルターから出て行かなければならない。

他の人たちに、寂しさを感染させる前に。

寂しさに感染してしまった僕とユミは、これから、外の世界で生きていかなければならない。

いや、外の世界で死ななければいけないのかもしれない。

避難前、ネット上では、ある感染者の言葉が広まっていた。

「寂しさを知らないことほど寂しいものはない」

それはただの強がりだと笑う人もいれば、激しく同意と書き込む人もいた。

寂しさは、感染者の眉をひそめさせ、涙腺を緩ませ、ため息をつかせ、胸を締めつける。

それがいったいどんな感じなのか、いま、感染して分かった。

だけど、なぜだろう。

生まれて初めての、苦しいはずの寂しさなのに、

今まででの人生で一番満たされているような、この気持ち。

僕は、ユミの手を握りしめた。